



装飾古墳に描かれた船の図像学的検討

宮原, 千波

(Citation)

美術史論集, 23:21-42

(Issue Date)

2023-02-20

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/0100486260>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486260>



装飾古墳に描かれた船の図像学的検討

《キーワード》 準構造船 古墳壁画

宮原千波

はじめに

一木を削り抜いて作る丸木舟を船底部として、その両側に舷側板を付加し、積載量や航行能力を高めた船を、一般的に準構造船と呼ぶ。準構造船は弥生時代に用いられはじめ、古墳時代には西日本を中心に広く普及したと考えられている。この準構造船は造船史においては丸木舟と構造船の移行期として位置づけられ、構造船の成立を探る上で欠かすことのできない重要な要素であると同時に、稲作技術をはじめとした多くの技術・文化が大陸から伝わった時期における水上移動を担い、大きな役割を果たしたものであるために、研究の進展が大いに期待される。しかしながら、現時点での準構造船部材の出土例は少なく不十分であり、その様相を明らかにするためには準構造船が表現された絵画資料や船形埴輪の検討も不可欠である。本稿では、この「表現された船」のうち、装飾古墳に描かれた船図像を、表現方法に着目して分類し、これまで「ゴンドラ型」という呼称により一括りにされてきたものを細分化する。さらに、分

類の結果を用いて図像の共有や伝播についても考察する。

第一章 問題の所在

(一) 準構造船の時期幅

日本列島において、舟・船は人々にとって重要な移動手段であった^①。現在確認されている最古の船資料は縄文時代早期後葉に属する千葉県市川市所在雷下遺跡出土の丸木舟(7590～7495calBP)^②であるが、それよりさらに遡る旧石器文化に属する静岡県沼津市所在の井出丸山遺跡では、神津島産黒曜石を用いた石器が存在することから、資源獲得のための海洋航海が行われていたとの指摘がなされている^③。

なかでも特に弥生時代以降、丸木舟である「単材／複材削舟」の両舷側に板を継ぎ足した船が用いられていたことが、出土した木製部材や絵画資料から指摘されており注目される。中世から古代の船の先駆的研究を行った石井謙治はこれを丸木舟と構造船の間の段階

に位置する「準構造船」と呼称し、以後考古学では、弥生時代以降に出現する舷側に板を継ぎ足した船を「準構造船」と呼称している。⁴⁾

実際の準構造船の部材は、船材としての同定が難しく、準構造船のイメージが全国的に普及するまでは、たとえ出土しても不明木製品や板材として扱われることも多かったが、一九八三年に大阪府八尾市久宝寺遺跡にて良好な準構造船部材資料が出土して以来、発掘調査における出土木製品の準構造船部材としての評価が盛んに行われるようになった。現在では西日本を中心に各地で出土例が見られるとともに、検出当時は不明木製品として同定されていた出土木製品や、井戸枿などに転用された木製品の、準構造船部材としての再評価が行われている。

現在確認されている準構造船についての最古の資料は鹿児島県南さつま市中津野遺跡出土の準構造船部材で、弥生時代前期後半に比定されている。一方で、七世紀ごろからは、「チキリ」や「ダボ」による横継ぎの技術を用いて、船底部に板材を継ぎ足して船幅を拡大する「オモキ造り」という構造が取り入れられるようになり、このような形態の船を「構造船」と呼称し準構造船と区別する。構造船は、厳密な定義が定まっていないため、出現した年代については様々な指摘があるが、奈良時代には作られ始めたと考えられる。しかし、中世の絵画資料にはたびたび船底部に削り抜き材を用いた準構造船も描かれていることから【図1】、準構造船から構造船への完全な置換は起こらず各地の環境や用途に応じて多様な構造の船が用いられていたことが想定される。⁵⁾ 以上のことから、準構造船は弥

生時代前期後半に登場し、古墳時代には西日本を中心に広く普及するが、その後徐々に構造船も用いられるようになったと考えられている。

(二) 先行研究と問題の所在

日本列島で用いられた準構造船については、出土船部材の復元推定や、船形埴輪の形態の分析により、構造に応じたいくつかの諸類型が指摘されている。本稿では、近年の調査報告や大韓民国での調査成果に基づいて分類を行っている柴田昌見二〇二一⁶⁾における諸類型を紹介する【表1】。

0. 丸木舟

丸木を削り抜き、成形した舟。一木を削り抜いて作った単材削舟(丸木舟)と前後に別木の削り抜き材を継ぎ足す複材削舟がある。

1. 準構造船I型

船首・船尾と舷側板を削り舟に付加する準構造船。「コベリ」と呼ばれる低い舷側板を用い、船首・船尾にも別材を付加して高さを出す。弥生時代前期に登場し、弥生時代前期末から中期初頭には西日本に拡大した。

2. 準構造船II型【図2】

両舷側板の前後に貫や梁を通して舷側の左右がずれないように固定する準構造船。弥生時代中期後半には出現している可能性が高いとされ、遅くとも古墳時代前期には存在していた。

3. 準構造船Ⅲ型【図3】

船首尾に豎板を付加し、舷側板の先端を固定する準構造船で、側面形状では船首と船尾が上下二つに分かれたように見える。遅くとも弥生時代後期には出現していたと考えられている。装飾古墳の船図像においても船体が上下二股に分かれた表現が用いられる例があり、豎板の描出と考えられている。

4. 準構造船Ⅳ型【図4】

2の「貫型」と3の「豎板型」を併用し、片方の先端が貫型のように反り上がり、もう片方の先端が豎板型のように上下二股に分かれる。弥生時代後期後半か、遅くとも古墳時代前期には出現していたと考えられる。

現時点では以上のような分類が提示されているが、準構造船関連資料を出土する遺跡は未だ百件程度であり、新出の資料からはこのほかにも様々なバリエーションや独自の構造を持った準構造船が用いられていたことが確認されており、地域差なども考慮しながらさらなる検討を行うことが求められる。

一方で、装飾古墳に関する論考は古くから盛んであり、描かれた船についてもたびたび言及されてきた。しかしながらその多くが葬送思想と船との関わりについての議論を中心としており、船そのものの形態に注目する論考は少なく、さらにまとまって研究の対象とするものはほとんどない。一九六〇年代に既に装飾古墳に関する体系的な研究を行っていた小林行雄氏は、装飾古墳の船図像はそのすべてがいわゆる「ゴンドラ型」に船首と船尾が反り上がった形の船

であるとし、斎藤忠氏は船の装飾を周囲の図像や形態的特徴から細分した⁸⁾。さらに森貞次郎氏は、彩色と線刻という各表現形式における船図像の変化を指摘したが⁹⁾、これらの論考はいずれも古墳時代に用いられた木造船についての情報が現在に比べ少なかつた頃のものであり、船の機能や構造についての考察は不十分である。さらに、これらの先行研究以後、船図像の記述は「ゴンドラ型」という表現に集約され、形態的特徴の観察が疎かにされており、特にそれは報告書や図録における図像の記述に顕著に表れている。

一方で、船の機能・構造に焦点を当てたものとしては、池田朋生氏の論考があり¹⁰⁾、舷側板・豎板・櫂・帆などの有無やその数から装飾古墳に描かれた船図像の分類を行っている。ここでは、準構造船についての考古学的調査成果を取り入れ、これまでの抽象的な議論から脱却し、どのような構造を持った船が描かれているのか具体的に推定する段階へと引き上げられている。しかしながら、論考内で具体的に検討されている装飾古墳は熊本県所在の二基にとどまり、これらの比較だけでは描かれた船の全体的な様相をつかむことはできない。

また、西山由美子氏は、九州地方の装飾古墳を中心として船図像の集成を行い、装飾全体における船図像の用いられ方、船の描き方、船に付属するものの三つの観点から詳細な分類を行った¹¹⁾。描かれた図像が何を示しているのか、あるいはそこから壁画全体がどのような意味を示しているのかという解釈を中心とした検討がなされてきたこれまでの論考に対し、船図像の表現方法に注目している点は革

新的である。しかしながら、西山氏による分類においてもなお、純粋な表現方法の検討ではなくあらかじめ構造を想定した上で検討がなされていることが課題として挙げられる。

以上のように、装飾古墳における船図像については、「ゴンドラ型」といった表現に依存し形態的特徴を十分に観察しないまま記述が行われた論考や、初めからある程度の構造を想定し解釈を中心とした分析が散見され、図像のもつ「かたち」を十分に観察し、描かれた船について考察するものはほとんどないと言ってよい。

第二章 本稿の目的と方法

本稿では、装飾古墳における船図像を、表現方法に注目して検討することで、従来の「ゴンドラ型」一括表現からの脱却を試み、さらに明らかに船底から船首尾への舷側板の立ち上がりを意識した準構造船の表現を抽出する。全国の装飾古墳の中から船図像が描かれるものを集成し、それらを「線」や「面」といった絵画的な構成要素に分解することで、形態的特徴に基づいた分類を行う。

ここで、留意しておきたいこととして線刻壁画の追刻に関する問題を挙げておきたい。線刻が施される石室や横穴の多くは、釘など棒状のものをを用いれば容易に線刻を施すことのできる柔らかい岩によつて構成されている。そのため、現在残存している壁画が古墳築造当時のものか、あるいは後世の加筆によるものかを判断することは非常に難しい。森浩一氏は線刻壁画の線刻時期について「(1)その

古墳の築造時期もしくは埋葬時のもの(2)年代は下るが、その古墳の主の末裔が描いたもの、(3)その古墳の主とはつながらない人が中世や近世などにさまざまな用途に古墳を利用したときに描いたもの(4)現代のたあいもない、しかし不注意な落書き(5)現代人が意図的に描いた偽物」との考えを示す¹²⁾。石室が未開口であれば石室内の装飾も古墳築造時のものとするができるが、残念ながら多くの古墳は古くから開口しており、数例の装飾古墳を除いて確実に古墳築造時の線刻であるといえるものはほとんどない。また、古墳時代に関係ない中近世の追刻が残る例は実際に多く存在するが、山崎純男氏は古墳がどのような目的で、どのように利用されたかを知ることが問題であり、これを解決するために開口後の古墳の利用のされ方の検討を行うとともに共通した線刻の集成とその検討の必要性を指摘している¹³⁾。

第三章 船図像の展開

装飾古墳の集成を網羅的に行っている文献¹⁴⁾を参考に、報告書等において船図像の存在が言及されている装飾古墳を集成し、性質の違いに留意して彩色による船図像と線刻による船図像とに分けてそれぞれ表に示した【表4】【表5】。現在石室や装飾が失われており、筆者が図像を確認することができなかったものは、表に記載したが分析対象からは除外している。また、長岩46・108号横穴や千金甲1・3号墳など浮き彫りによる装飾に彩色が施されているものに関

しては、形態的特徴の類似から彩色壁画と同様の分類事項を適用したが、表中では彩色壁画と区別し末尾に示した。¹⁵⁾ 一方で、石貫穴観音古墳など熊本県内の横穴墓にみられる死床の区切りや奥床の壁に船形を彫り出している例に関しては「描かれた船」とは呼び難く、またその形態も横穴墓の設計との関わりで決定されるものであるために除外した。

(一)彩色による船画像の検討【表3】

表現方法に注目すると、大きく以下の二つのタイプに分けられる。

I面を用いて表現するもの

a 曲線を用いて穏やかに船首尾を立ち上げる

b 船首尾を垂直に立ち上げる

i 船首尾が二股に分かれていない

ii 船首尾が二股に分かれている

II線のみで表現するもの

a 一重の曲線(弧線)を用いて表現する

b 二重の曲線(弧線)を用いて表現する

c 五郎山古墳の特殊型の表現

Iについては、船を表現する線が一定の幅を持ち、面を形成して、塗りの工程の形跡が読み取れるものとした。このタイプの船には、弧線を用いて船首尾を緩やかに立ち上げるI a類と、船底から船首尾がほぼ垂直に立ち上がり、深さが表現されたI b類が見られた【図5、6】。後者I b類のような船画像に関しては、一木を

削り抜いて作る丸木舟では画像のような船首尾の反り上がりを造り出すことは不可能であるという指摘があり、準構造船を表現したものと解釈できる。また、I b類の中には船首尾を二股に分けるものが見られ、これらは前述の準構造船ⅢタイプもしくはⅣタイプにおける豎板の表現とされている。福岡県宮若市竹原古墳【図7】や佐賀県鳥栖市田代太田古墳において船首尾を二股に分ける表現が類似していることは多くの先行研究において述べられてきたが、福岡県大牟田市萩ノ尾古墳【図8】や大分県玖珠郡鬼塚古墳における船首尾が末広がりになる船画像に関しても、立ち上がった船首尾の表現に着目すると先端にかけて末広がりになっており、竹原古墳や田代太田古墳の船首尾の表現から外形線のみを写し取ってきたような形になっている。以上のことから、これらの船画像もI b ii類として分類している。これらの古墳はいずれも古墳時代後期中葉の築造と考えられ時期差が小さいため、画像の変遷を辿ることはできないが、このような特異な画像において共有や伝播が起こった可能性があることは興味深い。また、船首尾を二股に分ける船画像の中でも原古墳は特異な様相を示す。そもそも原古墳に関しては、現在は壁画の損傷が激しく、実測図や模写図を参考に壁画を推定するほかないが、各人が製作した復元実測図がそれぞれ異なる画像を示しており、混乱を招いている。その中でも、近年の調査報告であるうきは市教育委員会二〇〇七に掲載されている壁画実測図および吉井町一九七四に掲載されている金子文夫氏による復元模写図【図9】を参考に分析を行った。金子氏の復元実測図によると、原古墳壁画の

船図像は、船首尾の片方のみを二股に分けている。これは船首のみ二股に分かれており船尾は貫型となっている先述の諸類型におけるIV型の準構造船として解釈することもできるが、前述の竹原古墳例や田代太田古墳例と比較すると二股の別れ方が極めて浅く、準構造船の刳舟部と豎板というよりはむしろ、II型における梁でつながれた二枚の舷側板を斜めに見た表現とも考えられる。とはいえ、正確な復元実測図の探求が求められる。

II類については、船を表現する線が幅を持たずワンストロークで描かれており、塗りの工程の形跡が見られないものとした。このような図像は、明確に船を表現していると判断しがたいものが多く、慎重に判断する必要がある。このタイプの図像は基本的に上向きの弧線によって緩やかに船首尾を上方へと立ち上げることで船体を表現するU字型の船が多く見られ、その中に弧線が一重のものと二重のものが見られた【図10、11】。一方で、特異な例としては福岡県筑紫野市五郎山古墳【図12】があり、こちらは線のみで船体を表現しているが弧線ではなく直線によって構成されており、さらに、船底から船首尾を二股に分けながら立ち上げ、船体の中央に箱形のもの積載する。二股に分かれた船首尾の表現については、前述したI b ii類と同様に準構造船の豎板を表現していると指摘されているが、船首尾が二股に分かれる準構造船III型では豎板は刳り抜き船底部の上部に設置されるのが通例であり、構造にやや不可解な点が残るため慎重に検討していくべきである。

熊本県山鹿市における横穴墓群入口や、熊本市内の古墳の石障に

は、浮彫による船の表現が見られる。これらの多くは、浮彫の上から彩色が施されているが、船の形態は彩色の有無に依らず非常に類似しているために、本稿ではこれらを「浮彫による船図像」として、彩色の有無にかかわらず集成した。熊本県山鹿市では長岩横穴、小原大塚横穴ともに船底から船首尾が垂直に立ち上がる船が表現される【図13】。石障系装飾古墳¹⁹である千金甲1号墳では曲線を中心とした吃水の浅い船が表現される【図14】。

(二)線刻壁画の検討【表3】

次に、石室に線刻による装飾が施された装飾古墳について検討を行う。上述のとおり追刻という問題を孕み、実際に古墳築造時に線刻されたかどうかの不確かではあるものの、それらをあえて分類するならば次のように分類される²⁰。

I 船底から船首尾が緩やかに立ち上がるもの

a 帆らしき構造を持たない

b 帆らしき構造を持つ

i 全体が三角形のもの

ii 帆柱から四角もしくは三角帆が張られるもの

iii 三角の骨組みに四角い帆が張られるもの

II 船底から船首尾が垂直に立ち上がるもの

初めに、特にI a類およびII類の図像に共通する特徴として船体に直角もしくは斜めに交わるように短い縦線が数本引かれているものが散見されることを指摘しておきたい。これらは多くの報告書類

で權と解釈されているが、おそらく線刻壁画は刻線の重なりが多く、
図像の判別が困難な場合が多いことから、權のような付帯設備を根
拠として図像を船と同定するケースが多いと考えられる。以上のよ
うな都合から、線刻壁画の船は彩色壁画の船と異なりその多くが帆
や權、舵を含めた付帯設備をもつ。また、船体の中央に横線を一本
入れるものもたびたび見られる。これは準構造船の刳舟部と舷側板
のつなぎと考えることもできるが、熊本県宇城市桂原1号墳例のよ
うに船体構造との整合が取れないものも存在し、このような船は舷
側板を表すというより、むしろ船の内部構造を遠近法的に表してい
る可能性もあると考えられる。

さて、まずI a類に関しては、刻線の重なりの中にかろうじて三
日月形を認めそれを船と評価しているために、本当に船を表現して
いるかどうか定かでないものも多い。従来このような図像について
も「ゴンドラ型」という表現がなされてきたが、これらが舷側板の
ような構造を伴った深さを持つ船であると断定することは難しく、
このような呼称は適切でないと考ええる。続いてI b類では、帆とみ
られる付帯設備をもつ。船体中央の帆柱から広がった帆が船の船首
尾に接し、船全体が大きな三角形となっているI b i類の表現が全
国的に広く見られ【図15】、I b ii類の表現【図16】に対してかな
りの優位が認められ注目に値する。また、I b i類とI b ii類の表
現の折衷型のような船図像で、三日月形の船体から帆柱が伸び、三
角形の骨組みと四角形の帆をそれぞれ表すI b iii類【図17】がある
が、これは帆船の構造を写実的に表現しているとみられ、中世絵画

などにおける帆船の表現と類似することから、その描かれた時期に
関しては注意が必要である。一方で、II類の表現は船底部から船首
尾への立ち上がりが明確に表現されている。前述した權とみられる
斜線をはじめとした船の付帯設備の表現もはっきりと行われ、また
それらの付帯設備が多数描かれているものからは、大型船への意識
が認められる。

以上のように、全国の装飾古墳における船図像について、図像の
絵画的構成要素を基準として分類を行い、展開を示した。ここで、
所在する地域を同じくする装飾古墳間において図像や表現が類似し
ている例はこれまでもたびたび指摘されているため、船図像に関
しても図像・表現の共有が地域間で行われていると考え、上記の分
類に基づいて該当する装飾古墳を地図に示した【図19—25】。さらに、
図像・表現の類似や差異には図像が描かれた時期も大きく関わって
いると考えられるため、集成した装飾古墳を築造時期ごとにグルー
ピングし、その中で各表現分類における古墳の基数を計上した²¹⁾。

第四章 考察

(一)空間分布

船図像を有する彩色壁画古墳のほとんどは九州地方に所在してお
り、九州地方以外では鳥取県の浮彫例と茨城県の彩色例の三例が確
認できるのみである。これらは福岡県久留米市、福岡県うきは市、
大分県日田市、大分県玖珠町を東西に跨るように流れる筑後川沿い

に東西方向のラインを形成しており、今回の集成においては十一例を数える。表現方法についてはややばらつきがあるものの、福岡県久留米市、うきは市には面を用いて船を表現するⅠ類が大半を占める。うきは市に所在する三例はどれも面を用いて船底部から船首尾を垂直に立ち上げるⅠb類であり、準構造船の表現が試みられている。また、筑後川沿いの東西ラインの中で福岡県の装飾古墳とやや距離を置いて所在する大分県日田市、玖珠町の装飾古墳ではⅠb ii類の表現が用いられ、「豎板」を有する準構造船Ⅲ型が意識されている。一方、筑後川沿い以外の彩色による船図像をもつ装飾古墳は、筑後川沿いから佐賀県鳥栖市、福岡県筑紫野市、福岡県筑前町にかけて北上し、福岡県宮若市、福岡県中間市へと南北方向に広がりをものも特徴的である。これらの地域における装飾古墳が有する船図像は、福岡県筑紫野市五郎山古墳【図12】、福岡県宮若市竹原古墳【図7】、および佐賀県鳥栖市田代太田古墳にみられる船首尾を二股に分かれさせる「豎板」の描出(表2内Ⅰb ii類)をはじめとして、より高度な構造を持った船の表現が伺える。

熊本県では、有明海沿岸に横穴における浮彫の船図装飾が見られる。このうちいわゆる小林一九六四²⁰などにおいて指摘される「横穴系装飾古墳」であるのが山鹿市長岩横穴、小原大塚横穴【図13】などであり、外壁部に船図像が表現される。また、小林一九六四における「石障系装飾古墳」に属する千金甲1号墳【図14】、3号墳もやや南寄りだが有明海沿岸に位置する。これら浮彫の船図像のほとんどは船底部から船首尾が垂直に立ち上がっている。また、横穴が

集中する地域に近接する熊本県山鹿市弁慶ヶ穴古墳および福岡県大牟田市所在の萩ノ尾古墳【図8】においても、ともに明らかに大型の準構造船を意識して船首尾の立ち上がりを表現した船が描かれる。このように、有明海沿岸地域では、準構造船を意識した図像・表現が盛んに行われている。茨城県²¹の二例に関してはいずれも保存状態が悪く、また図像も抽象的な表現にとどまるために、明確に船図像と断定できるものは無い。

船図像を有する線刻壁画については九州、山陰、南北関東に分布が見られ、わずかだが四国、関西、北陸、東北でも確認されている。これらの装飾古墳は、ほぼ全てにおいて海沿いに位置し、各地域にまとまって分布しているのが特徴的である。ここで横穴墓に関して、船図像を持つ横穴墓は同一横穴墓群内に二基以下の場合が多く、横穴墓群の規模による偏りはないと考えられる。

特に類似した船図像が集中して分布するのは、長崎県壱岐市と熊本県宇土半島基部、神奈川県中郡などである。まず、宇土半島基部においては三日月形の船体に柱を立て、そこに布をたなびかせるⅠb ii類【図16】もしくは線刻で船首尾を垂直に立ち上げるⅡ類の表現が大部分を占め、表現方法や図像の共有が伺える。長崎県壱岐市でも、そのほとんどが帆らしき表現を持つ船図像であり、全体を三角形のように表現するⅠb i類【図15】、または三角形の骨組みと四角形の帆を表現するⅠb iii類に集約される。前述したように、線刻壁画の帆船とみられる表現の中には後世の追刻が認められるものも複数報告されており、その線刻年代には注意が必要であるが、少

なくとも図像や表現の共有は確認できる。神奈川県ではI b iii類のような複雑な構造を表現した図像は見られず、全体が三角形のように表現されたI b i類もしくは三日月形の船体から帆柱を立てるI b ii類の表現がまとまって見られる。

一方で、帆のような構造を持たないI a類・II類は、全国的に分散しており、集中して見られる箇所はない。また、弥生時代から作られている線刻土器や絵画銅鐸、線刻木製品においてはこれらI a類・II類のような形態的特徴を持った船図像が多く見られるのに対し、装飾古墳におけるこれらの線刻に類似した船図像は香川県善通寺市宮が尾古墳【図18】や大阪府柏原市高井田横穴に見られるものの、その数は決して多いとは言えない。

(二) 時間分布

次に、築造年代ごとの表現の分布について分析を行うが、線刻による船図像については前述のように追刻の問題があり、古墳築造時期と壁画線刻時期が一致するものは少ないと考えられるため、【図27】に示すのみとし、分析からは除外する。

船図像を有する彩色壁画については、古墳時代中期は低調で、古墳時代後期前葉に入ると、石障系装飾古墳の熊本県熊本市千金甲3号墳、壁画系装飾古墳の福岡県うきは市日岡古墳でI a類の表現が登場する。彩色壁画における船図像が急増するのは古墳時代後期中葉から後葉であるが、ここで特徴的なのは、後期中葉と後期後葉における図像の変化である。【図26】のグラフにおいて、古墳時代後

期中葉の船図像は船首尾の立ち上がりが意識されたI b i類が多くを占め、II a類・II c類もみられる。一方で、古墳時代後期後葉の船図像は、I a類・I b i類・I b ii類・II b類の表現によって構成されるが、全体に占めるI a類・II b類といった船首尾の立ち上がりが明確に表現されない単純な表現の割合が大きく増加している。以上、彩色壁画古墳における船図像は、古墳時代後期前葉にI a類の面を用いた浅い船の表現に始まり、後期中葉から後葉にかけて図像が急増するが、この際舷側板をもつ大型準構造船を意識したI b類の表現が多用される。その後、後期後葉では急速に船図像がI a類やII b/c類といった単純表現へと変化するが、これは古墳時代の埴輪の造形などにも見られる「形骸化」と関連していると理解することができる。古墳時代後期には既に広く普及していたと考えられる準構造船であるが、装飾古墳における表現は、初現期には準構造船の特徴を代表する船首尾の立ち上がりを表現していたが、やがてその形態的特徴の一部を失ってU字型の浅い船へと形骸化していった。しかしながら、七世紀前半とされる瀬戸14号横穴の船図像はI b i類の表現をもつものであり、これより新しい資料が確認されていないために、飛鳥時代以降の彩色壁画古墳における船図像の様相は判断しがたい。

おわりに

本稿では装飾古墳における船図像について、表現の方法に着目し、

図像を線や面などの絵画的構成要素に分解して検討・分析を行った。彩色・線刻に関わらず多くの船図像が佐原真氏の指摘するように側面から見た図と斜めから見た図を組み合わせ、U字もしくはコの字を右に九十度回転させたような船体の表現をもつが、その中でもとりわけ船底部から船首尾をほぼ垂直に立ち上げるものと船首尾の立ち上がりが浅いものとを区別することで、明確に準構造船を意図したものと、準構造船を（あるいは船自体をも）意図していない可能性のあるもの、及び図像が形骸化し簡略化されたものを区分することができた。

また、地域ごと・年代ごとの分析を通して、彩色による船図像については筑後川流域の東西の拡がり、および筑紫野市から遠賀川流域の桂川町に至る南北の拡がりにおける図像・表現の共有を指摘した。また、彩色による船表現が最も盛んである古墳時代後期中葉から後葉にかけて、まず準構造船の船首尾の立ち上がりが盛んに表現された後、浅いU字型の船が遅れて増加する様相を明らかにし、古墳時代の埴輪にも見られる図像の形骸化による説明を試みた。

線刻による船図像については、常に追刻の問題を孕んでおり、線刻が施された年代が明らかにならない限り図像を中心とした議論を行うことは難しい。弥生時代から制作されている線刻土器や木製品、銅鐸に描かれた船図像に類似するものが裝飾古墳の線刻壁画の船図像には少なく連続性が見られないことも、線刻による船図像の制作年代に疑問を呈する一つの要因となっているのかもしれない。しかしながら全国的にその多くが沿岸部に所在するという分布上の特徴

は彩色による船図像とは大きく異なっており、特に熊本県宇土半島基部および長崎県壱岐市、神奈川県中郡などの集中地域では類似した帆船とみられる図像が描かれており、正しい線刻年代が後世に下るとしても、少なくとも図像・表現が共有された上で線刻が施されていることは指摘できる。

古墳壁画の図像については古い論考が多く、一九九〇年代以前に比べて二〇〇〇年代に入ってから活発な議論が行われていない。特に美術史における議論は高松塚古墳やキトラ古墳を除いてほとんど行われていない。考古学的調査成果の報告によって準構造船についてのより詳細な情報が増えている現在、美術史学と考古学の両視点からの検討は必須であり、それによって描かれた船の実態についてさらに多くのことを明らかにできると考えている。

註

- (1) 丸木舟は「舟」、準構造船・構造船は「船」と呼称されることが多いが、本稿においては混乱を避けるため「船」に表記を統一する。
- (2) 工藤ほか二〇一四「雷下遺跡から出土した丸木舟と木胎漆器の14C年代測定」『研究連絡誌』七五、十三―十六頁。
- (3) N. Ikeya, "Maritime Transport of Obsidian In Japan during the Upper Paleolith", In: Y. Karifu, M. Izuhō, T. Goebel, H. Sato, and A. Ono (eds.), *Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia*, College Station: Texas A&M University Press, 2015, pp. 362-375.
- (4) 石井謙治一九七二『日本の船』創元社、十四―十九頁、および辻尾榮市

- 二〇一八『舟船考古学』ニューサイエンス社、六十七―七十一頁ほか。
- (5) 「北野天神縁起絵巻」をはじめとする中世絵巻には、三段組の準構造船が描かれており注目される(小島道裕二〇二二「絵画資料に描かれた中世の船」『日本絵巻大成』)に見える舟の画像一覽」国立歴史博物館研究報告第二二三集、二四七頁。丸木舟についても同様に、古墳時代以降も丸木舟が用いられる事例がある。
- (6) 柴田昌児二〇二二「西日本の古代木造船と海上における人間活動―瀬戸内海と日本海―」『新潟考古学会二〇二二年度秋季シンポジウム発表資料』五十三―五十四頁。
- (7) 小林行雄一九六四『装飾古墳』平凡社、二十五頁。
- (8) 斎藤忠一九七三『日本装飾古墳の研究』講談社、一四七―一四八頁。
- (9) 森貞次郎一九八五『装飾古墳』教育社歴史新書、一二二―一二七頁。
- (10) 池田朋生一九九五「装飾古墳に描かれた船」『考古学ジャーナル』三九五号、二十八―三十二頁。
- (11) 西山由美子二〇〇二「古墳に描かれた船」『第51回埋蔵文化財研究集会装飾古墳の展開―彩色系装飾古墳を中心に―』発表要旨集、九十七―一〇二頁。
- (12) 森浩一九七九「装飾古墳の旅」『古墳の旅』一三七―一四四頁。
- (13) 山崎純男「福岡県宗像市桜京古墳にみられる船の線刻絵画をめぐって」『郵政考古紀要 辻尾榮市氏古稀記念 歴史・民俗・考古学論攷Ⅱ』三八九―三九一頁。
- (14) 集成に関しては、熊本県教育委員会一九八四『熊本県装飾古墳総合調査報告書(熊本県文化財調査報告 第六十八集)』、大分県教育委員会一九九五『大分の装飾古墳(大分県文化財調査報告書 第九十二輯)』、熊本県立装飾古墳館一九九七『福岡県の装飾古墳(全国の装飾古墳シリーズ三)』、同一九九八『佐賀県・長崎県の装飾古墳(全国の装飾古墳シリーズ四)』、同一九九九『中国・四国地方の装飾古墳(全国の装飾古墳シリーズ五)』、同二〇〇〇『近畿地方の装飾古墳(全国の装飾古墳シリーズ六)』、同二〇〇九『茨城県の装飾古墳(全国の装飾古墳シリーズ八)』、西山由美子二〇〇二、前掲書、九十七―一〇二頁、および埋蔵文化財研究会二〇〇二『第五十一回埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開―彩色系装飾古墳を中心に―』資料集『埋蔵文化財研究会第五十一回研究集会実行委員、深澤芳樹二〇一四「日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料一覽」』『国際常民文化研究叢書五』二〇八―二三頁、坂口圭太郎、嶋田博紀、村上光治二〇一八「全国の装飾古墳一覽(中間報告)」『熊本県立装飾古墳館研究紀要』第十四集、一―十四頁を参考に行った。
- (15) 表中の時期区分については【表1】を参考にした。
- (16) 辰巳和弘二〇一一「他界へ翔る船―「黄泉の国」の考古学」新泉社、一〇一頁。
- (17) うきは市教育委員会二〇〇七『屋形古墳群(うきは市文化財調査報告書第二集)』三十頁。
- (18) 吉井町一九七四『吉井町誌』吉井町、六十四頁。
- (19) 小林行雄一九六四、前掲書、二六―三十二頁。
- (20) 線刻による船図像を分類するにあたり、その数の多さから便宜上「帆」という語を用いたが、古墳時代における帆の利用については考古学的に十分な証拠がなく、追刻の問題と併せて慎重に議論すべきであり、本稿においてもあくまで図像の一つとして扱い、その解釈については稿を改めてい。とはいえ、帆らしき構造をもつ船図像は線刻壁画古墳において非常に多く存在し、筆者の集成でも半数以上を占める。このような帆船図像についてはもはや無視することはできず、なおさら図像の検討が重要となるであろう。
- (21) 装飾古墳の築造時期ごとのグループピングは【表2】に示した時代区分に従った。
- (22) 小林行雄一九六四、前掲書、二六―三十二頁。

(23) 高橋克壽一九八八「論説」器材埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第七十一巻第二号、一〇〇—一〇三頁。

(24) 佐原真二〇〇一「弥生・古墳時代の船の絵」『考古学研究』第四十八巻第一号、五十二—七十一頁。

図版出典

図1 小松茂美一九九七『北野天神縁起(日本絵巻大成二十二)』中央公論社。

図2 東京国立博物館二〇〇五『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書 重要文化財 西都原古墳群出土埴輪 子持家・船』同成社。

図3 大阪市文化協会一九九一『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告Ⅳ 市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書 前編』

図4 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所二〇〇二『入佐川遺跡3(兵庫県文化財調査報告二二九)』

図5 福岡県一九三二『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第七輯』に筆者加筆。

図6 うきは市教育委員会二〇一八『国指定史跡 鳥船塚古墳(うきは市文化財調査報告書第二十五集)』

図7 若宮町教育委員会一九八二『竹原古墳 竹原古墳保存修理事業概要報告(若宮町文化財調査報告四)』

図8 大牟田市教育委員会二〇〇一『萩ノ尾古墳 福岡県大牟田市東萩尾二九〇に所在する国指定史跡「萩ノ尾古墳」の範囲確認調査報告(大牟田市文化財調査報告書 第五十四集)』

図9 うきは市教育委員会二〇〇七『国指定史跡 屋形古墳群(うきは市文化財調査報告書 第二集)』

図10 田主丸町教育委員会二〇〇二『隈3号墳(田主丸町文化財調査報告書 第二十集)』

図11 大分県教育委員会一九九五『大分の装飾古墳(大分県文化財調査報告書 第九十二輯)』

図12 筑紫野市教育委員会一九九八『国史跡 五郎山古墳―保存整備事業に伴う発掘調査―(筑紫野市文化財調査報告書第五十七集)』

図13、14 熊本県教育委員会一九八四『熊本県装飾古墳総合調査報告書(熊本県文化財調査報告 第六十八集)』

図15 埋蔵文化財研究会二〇〇二『第五一回埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開―彩色系装飾古墳を中心に― 資料集』埋蔵文化財研究会 第五十一回研究集会実行委員会。

図16 熊本県教育委員会一九八四、前掲書。

図17 埋蔵文化財研究会二〇〇二、前掲書。

図18 普通寺市文化財保護協会一九九三『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)調査報告』普通寺市教育委員会文化振興室。

図19、25 白地図(国土地理院)、色別標高図(国土地理院)を加工して筆者作成。

図26、27 筆者作成。

表1 柴田二〇二一をもとに筆者作成。

表2 須恵器編年は田辺昭三一九六六『陶器古窯址群Ⅰ―平安学園考古クラブ、飛鳥編年は西弘海一九八六『土器様式の成立とその背景』真陽社、埴輪編年は埴輪検討会二〇二二『埴輪の分類と編年』埴輪検討会シンポジウム二〇二二資料集、副葬品編年は大賀二〇一三『前期古墳の築造状況とその画期』『前期古墳から見た播磨』六十一—九十六頁に依拠する。

筆者作成。

表3 筆者作成。

表4、5 筆者作成。

〔附記〕

本稿は、二〇二二年度に神戸大学文学部に提出した卒業論文を基底として書き改めたものである。執筆に際しては、神戸大学文学部での指導教員の宮下規久朗先生をはじめ、東京大学美術史学研究室の増記隆介先生、東京大学考古学研究室の根岸洋先生のご指導を賜った。末筆ではありますが、記してお礼申し上げます。

宮原千波（みやらはら・ちなみ）

二〇二二年 神戸大学文学部卒業

二〇二二年 東京大学大学院人文社会科学系研究科修士課程在籍

- 図1 (左)《北野天神縁起(承久本)》第四卷第二段より部分。
13世紀、紙本着色、北野天満宮所蔵
- 図2 (右上)西部原170号墳出土 船形埴輪実測図(1/20)
5世紀後半、東京国立博物館
- 図3 (右下)長原高廻り2号墳出土 船形埴輪実測図(1/20)
5世紀、大阪歴史博物館

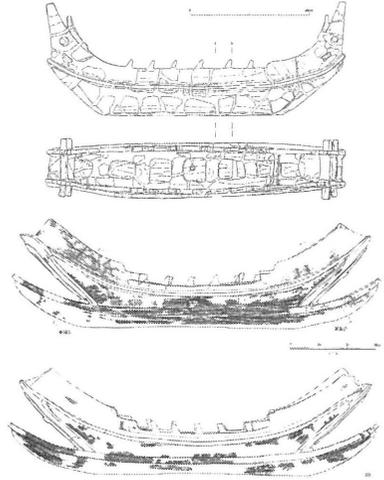
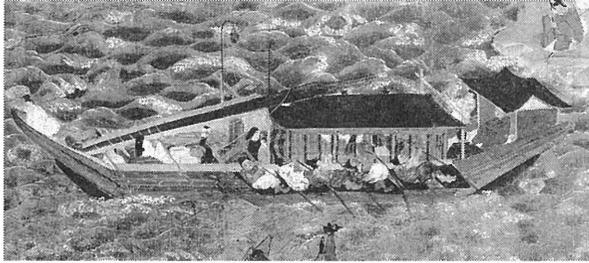


図5 観音塚古墳石室内装飾見取り図(縮尺不明)
古墳時代後期、福岡県朝倉市

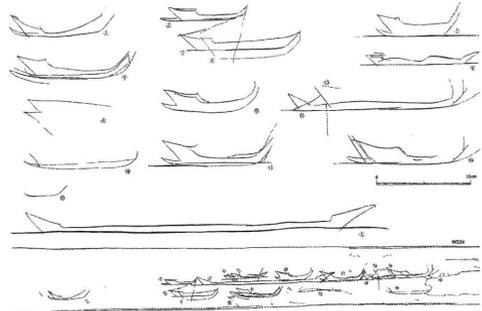


図4 袴狭遺跡出土板絵(1/6)
弥生時代後期、兵庫県教育委員会



図7 竹原古墳奥壁装飾実測図(部分、1/20)
古墳時代後期、福岡県若宮市

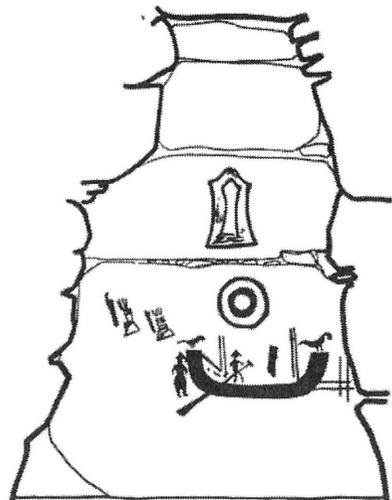


図6 鳥船塚古墳奥壁装飾実測図(1/30)
古墳時代後期、福岡県うきは市

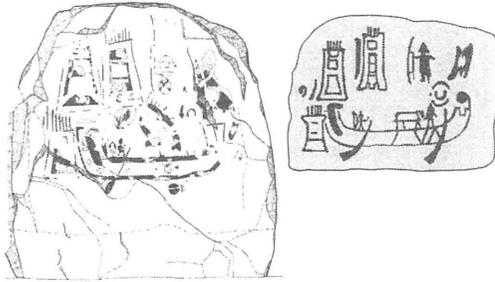


図9 原古墳奥壁装飾実測図および復元模写図(1/50)
古墳時代後期、福岡県うきは市



図8 萩野尾古墳奥壁装飾
古墳時代後期、福岡県大牟田市

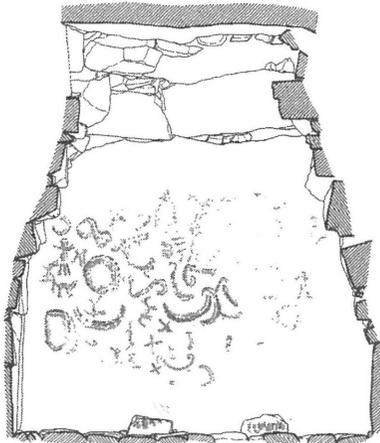


図11 ガランドヤ第一号墳奥壁装飾復元模写図(1/50)
(日下八光氏作成) 古墳時代後期、大分県日田市

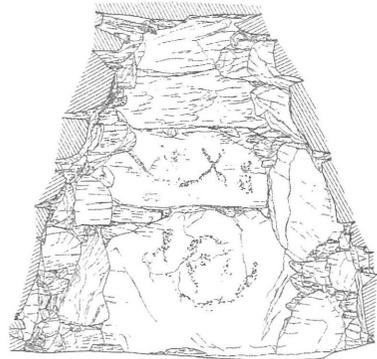


図10 隈3号墳奥壁装飾実測図(1/50)
古墳時代後期、福岡県うきは市田主丸町

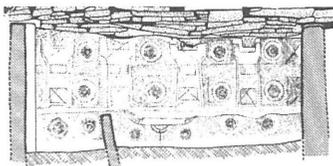


図14 千金甲1号墳奥壁装飾実測図(1/50)
古墳時代中期、熊本県熊本市

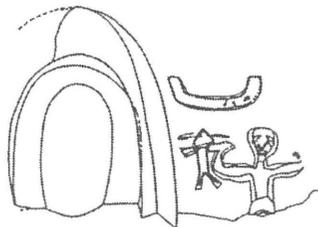


図13 小原大塚41号横穴墓
入口装飾部実測図(部分、
1/50)
古墳時代後期、熊本県山
鹿市

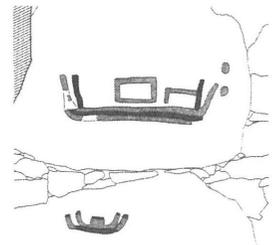


図12 五郎山古墳玄室西
側壁実測図
(部分、1/50)
古墳時代後期、福
岡県筑紫野市

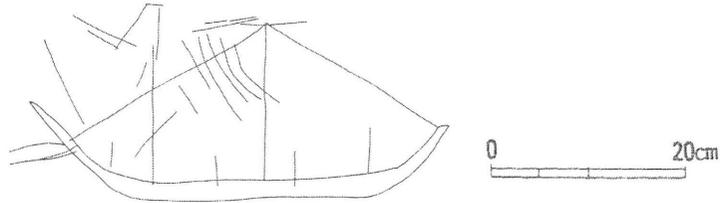


図 15 空山 16 号墳女室左側壁線刻実測図 (1/6) 古墳時代後期、鳥取県鳥取市



図 18 宮が尾古墳線刻実測図 (部分、1/10) 古墳時代後期、香川県善通寺市

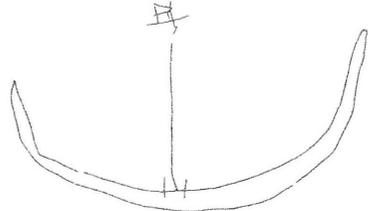


図 16 ヤンボシ塚古墳線刻実測図 (部分、1/6) 古墳時代後期、熊本県宇土市

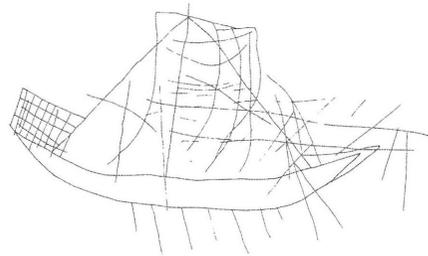


図 17 鷲山古墳線刻実測図 (部分、1/6) 古墳時代後期、鳥取県鳥取市

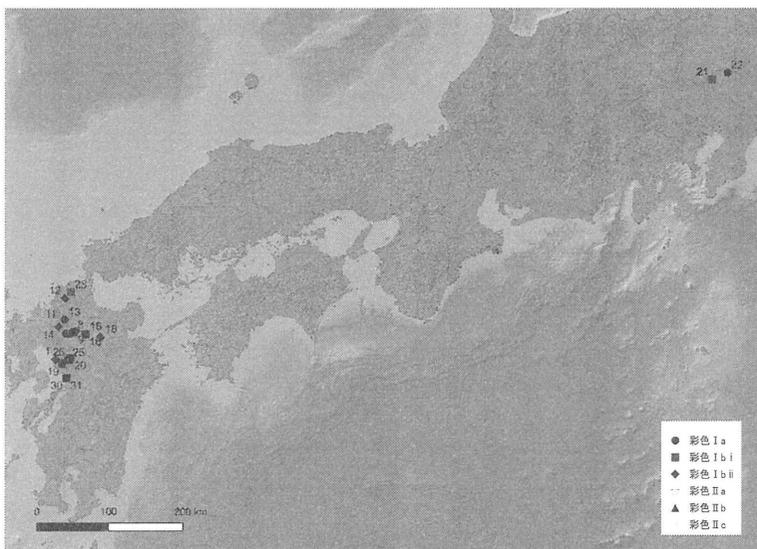


図 19 彩色古墳分布図 (1/1000000) 以下、図 25 まですべて地理院地図及び QGIS より筆者作成。

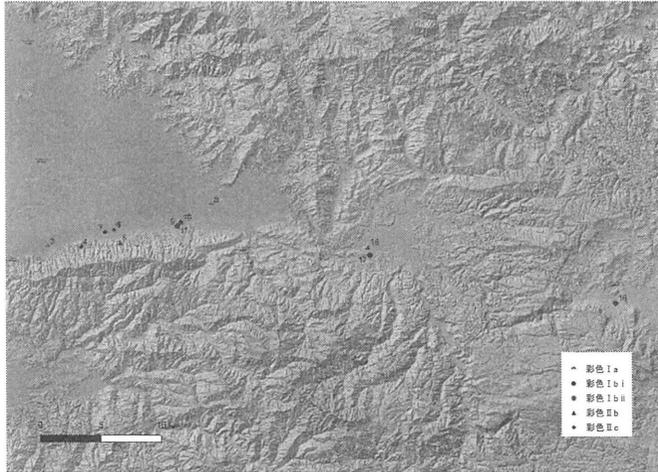


図 20 彩色による船図像を有する装飾古墳壁画（以下、彩色壁画）空間分布図筑後川流域（1/500000）

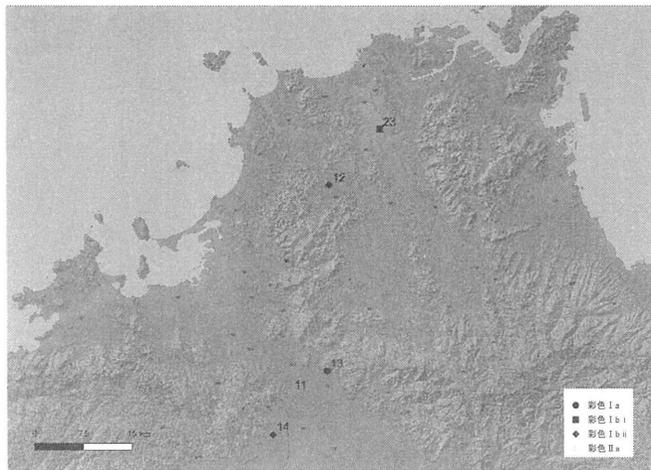


図 21 彩色壁画空間分布図、福岡県北部（1/750000）

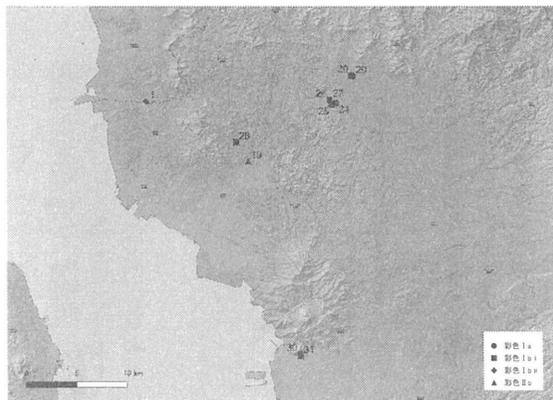


図 22 彩色壁画空間分布図、有明海沿岸部（1/5000）

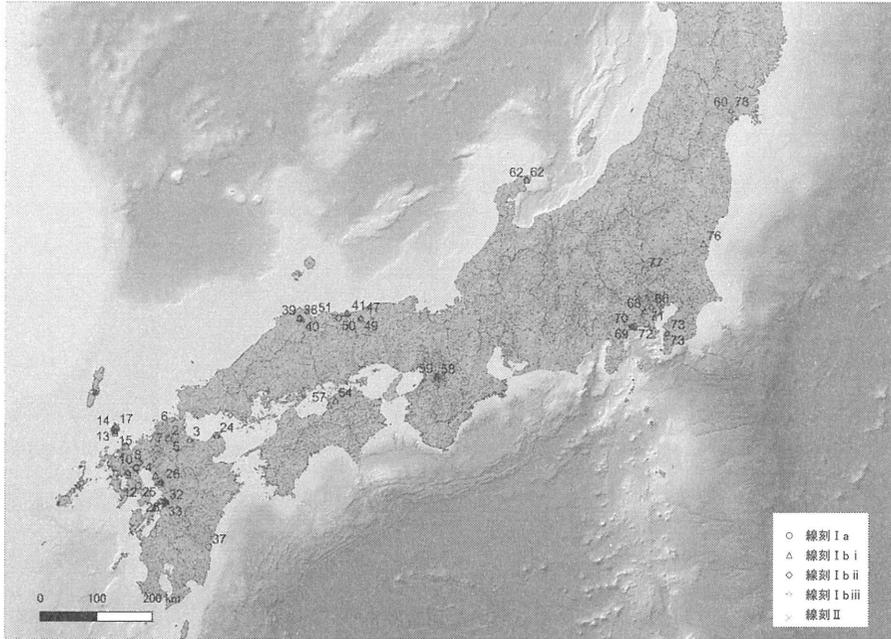


図 23 線刻による船画像を有する装飾古墳壁画（以下、線刻壁画）空間分布図（1/10000000）

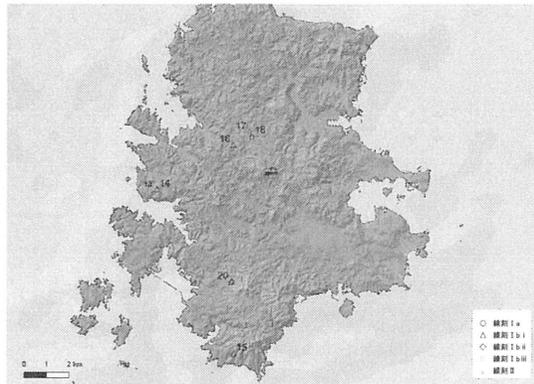


図 24 線刻壁画空間分布図、長崎県壱岐市（1/2000）

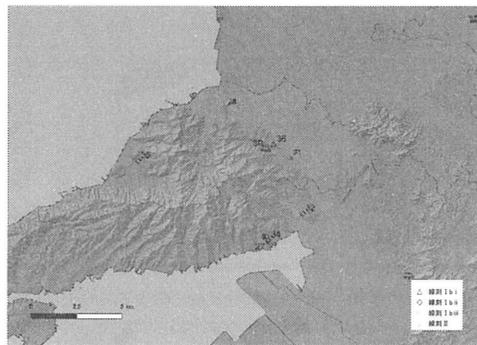


図 25 線刻壁画空間分布図、宇土半島基部（1/2000）

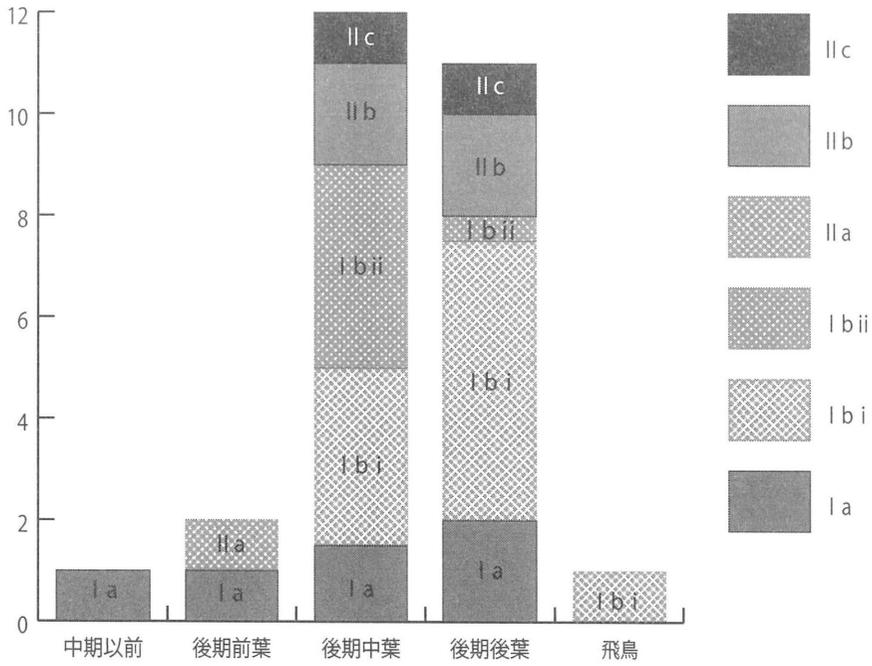


図 26 彩色による船図像、時間分布 (筆者作成)

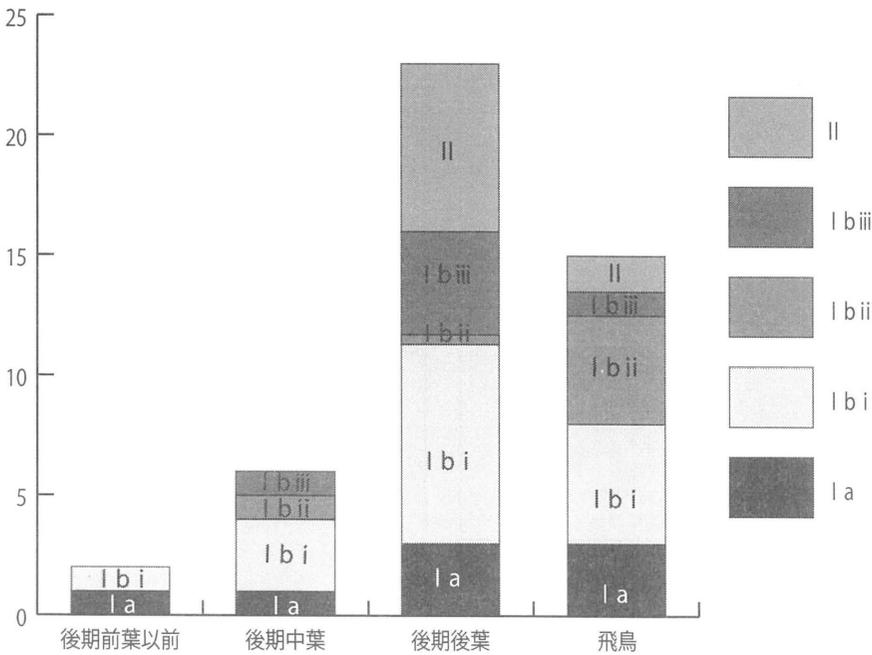


図 27 線刻による船図像、時間分布 (筆者作成)

本グラフを作成するにあたり、複数種類の図像を持つ装飾古墳については、種類数で割った数値を加算した。

表1 準構造船諸類型模式図（柴田 2021 をもとに筆者作成）

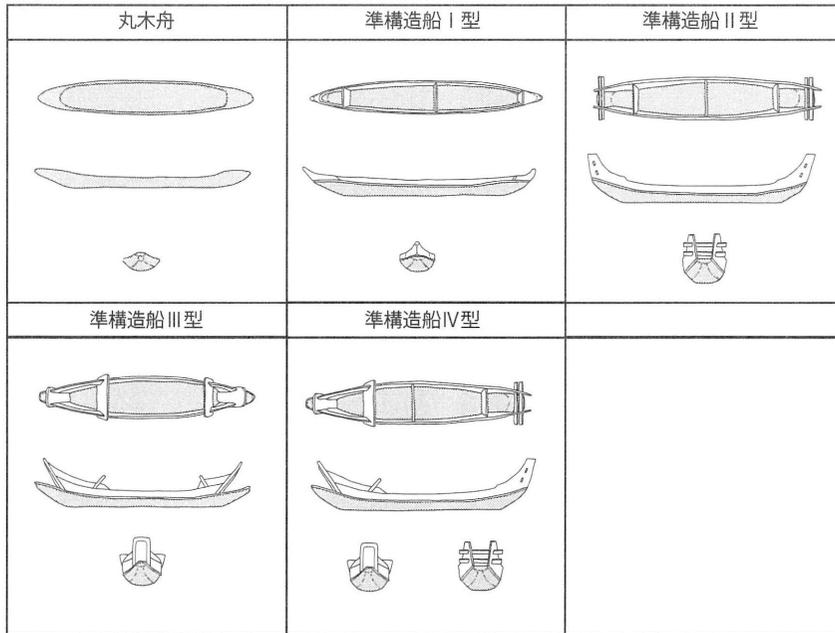


表2 時期区分（須恵器編年は田辺 1966、飛鳥須恵器編年は西 1986、埴輪編年は埴輪検討会 2022、副葬品編年は大賀 2013 に依る。）

時期区分	須恵器	飛鳥	埴輪	副葬品	
古墳前期			I-1	前Ⅰ	
			I-2	前Ⅱ	
			I-3	前Ⅲ	
			I-4	前Ⅳ	
			Ⅱ-1	前Ⅴ 前Ⅵ	
			Ⅱ-2	前Ⅶ	
	古墳中期	TG232		Ⅲ	中Ⅰ
TK73 TK216 (ON46)			Ⅳ-1	中Ⅱ	
			Ⅳ2	中Ⅲ	
TK208			Ⅳ-3	中Ⅳ	
TK23 TK47			V-1	後Ⅰ	
古墳後期	MT15		V-2		
	TK10 (MT85)		V-3	後Ⅱ	
	TK43		V-4	後Ⅲ	
	TK209			後Ⅳ	
	TK217	飛鳥Ⅰ 飛鳥Ⅱ			
飛鳥	TK46	飛鳥Ⅲ			
	TK48	飛鳥Ⅳ			
時期区分	須恵器	飛鳥	埴輪	副葬品	
中期	後葉		V-1	後Ⅰ	
				TK23 TK47	
	前葉		MT15	V-2	
			TK10	V-3	後Ⅱ
後期	中葉	(MT85)	V-4		
		TK43		後Ⅲ	
	後葉	TK209		後Ⅳ	
飛鳥		飛鳥Ⅰ 飛鳥Ⅱ			
		TK46	飛鳥Ⅲ		
		TK48	飛鳥Ⅳ		

表3 装飾古墳船図像分類模式図 (筆者作成)

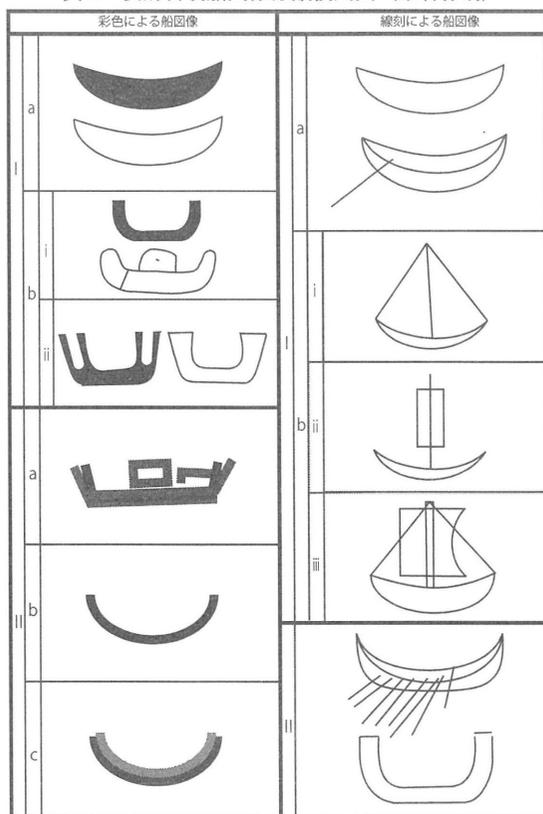


表4 彩色による船図像一覧 (筆者作成)

No.	遺跡名	所在地	時期	墳丘	規模	主体部	分類1	分類2	船図像の用いられた方	付属するもの
1	萩ノ尾古墳	福岡県大牟田市東萩ノ尾町 290	後期中葉	円墳	16m	複室横穴式石室	I	b ii	B	ア
2	下馬場古墳	福岡県久留米市草野町吉木 2263	後期中葉	円墳	39m	複室横穴式石室	I	a	B	ア
3	隈3号墳	福岡県羽野郡田主丸町大字中尾	後期中葉	円墳	14m	腹式横穴式石室	II	b	B	エ
4	西館古墳	福岡県久留米市田主丸町益生田	後期中葉	円墳	14m	複室横穴式石室	II	c	B	ア
5	寺徳古墳	福岡県久留米市田主丸町益生田	後期後葉	円墳	20m	複室横穴式石室	II	b	B	ア
6	中原狐塚古墳	福岡県うきは市田主丸町大字地徳	後期中葉	円墳	17m	複室横穴式石室	II	b	B	ア
7	日岡古墳	福岡県うきは市吉井町若宮字高林	後期前葉	前方後円墳	74m	横穴式石室	I	a	B	ア
8	原古墳	福岡県うきは市吉井町大字富永字原	後期中葉	円墳		横穴式石室	I	b i	A	イオキ
9	珍敷塚古墳	福岡県うきは市吉井町大字富永字原	後期中葉	不明		複室横穴式石室	I	b i	A	イエキク
10	鳥船塚古墳	福岡県うきは市吉井町大字富永字古畑	後期後葉	円墳		横穴式石室	I	b i	A	イエキク
11	五郎山古墳	福岡県筑紫野市原田字五郎山	後期前葉	円墳	34m	複室横穴式石室	II	a	A	カ
12	竹原古墳	福岡県宮若市竹原字切立	後期中葉	円墳	18m	複室横穴式石室	I	b ii	A	ア
13	観音塚古墳	福岡県朝倉郡筑前町上字浦ノ谷	後期後葉	円墳		複室横穴式石室	I	a	B	ク
14	田代太田古墳	佐賀県鳥栖市 田代太田町田代	後期中葉	円墳	42m	複室横穴式石室	I	b ii	B	ア
15	天山古墳	佐賀県多久市東多久町納所字天山第一	後期後葉	不明		横穴式石室	—	—	—	—
16	日田穴観音古墳	大分県日田市内河野	後期後葉	不明		複室横穴式石室	I	b i / b ii	B	ア/ク
17	ガランドヤ1号墳	大分県日田市石井町字西の園	後期後葉	不明		横穴式石室	II	c	B	ア
18	玖珠鬼塚古墳	大分県玖珠郡玖珠町小田	後期中葉	不明		横穴式石室	I	b ii	B	ア
19	永安寺東古墳	熊本県玉名市玉名永安寺	後期後葉	不明		横穴式石室	II	b	B	ア
20	弁慶ガ穴古墳	熊本県山鹿市熊入	後期中葉	円墳		横穴式石室	I	b i / a	A	イウカ
21	船玉古墳	茨城県筑西市船玉字岩屋	後期後葉	方墳	35m	横穴式石室	I	b i	B	ア
22	花園3号墳	茨城県桜川市友部字山田	後期後葉	方墳	30m	横穴式石室	I	a	B	ア
23	瀬戸14号横穴	福岡県中間市理生字瀬戸口	飛鳥			横穴	I	b i	B	ア
24	長岩46号横穴	熊本県山鹿市志々岐長岩	後期後葉	横穴		横穴	I	b i	C	ク
25	長岩108号横穴	熊本県山鹿市志々岐長岩	後期後葉	横穴		横穴	I	b i	B	ア
26	小原大塚39号横穴	熊本県山鹿市小原大塚	後期後葉	横穴		横穴	I	a/b i	B/C	ア
27	小原大塚41号横穴	熊本県山鹿市小原大塚	後期後葉	横穴		横穴	I	b i	B	ア
28	石貫ナギノ12号横穴	熊本県玉名市大字石貫	後期後葉	横穴		横穴	I	b i	B	ア
29	晩田山31号墳	鳥取県米子市淀江町	飛鳥	方墳	22m	切石横穴式石室	—	—	C	ア
30	千金甲1号墳	熊本県熊本市小島下町勝負谷	中期後葉	円墳		横穴式石室	I	a	B	ア
31	千金甲3号墳	熊本県熊本市小島下町高坂山	後期中葉	円墳	15m	横穴式石室	I	b i	B	ア

表5 線刻による船図像一覧 (筆者作成)

No	遺跡名	所在地	時期	墳丘	規模	主体部	分類1	分類2	船図像の用いられ方	付属するもの
1	土手の内1号横穴	福岡県中間市大隈塚生土手の内				横穴	—	—	—	—
2	塚生塚山横穴墓3a-1号	福岡県中間市大隈塚生土手の内	後期後葉	墳穴	18.2m	複室横穴式石室	I	a/b/i	B	ア
3	原3号墳	福岡県豊前市松江宇御陵掛	飛鳥	円墳		横穴式石室	I	b i	A	キ
4	倉永古墳	福岡県大牟田市倉永甘木山	後期中葉	円墳		横穴式石室	I	b i	B	ア
5	狐塚古墳	福岡県朝倉市入地宇狐塚	後期後葉	円墳	30m	複室横穴式石室	II	—	A	エキ
6	原菜古墳	福岡県茶臼山南田原	後期中葉	前方後円墳	39m	横穴式石室	I	b iii	C	キ
7	丸ノ口古墳群VI-2号墳	福岡県筑前郡那珂川町	後期中葉	円墳		横穴式石室	—	—	B	ア
8	北坊古墳	佐賀県多久市東多久町新所字三ノ北坊		円墳	12.5m	横穴式石室	I	b ii	A	ア
9	鳥籠寺古墳	佐賀県筑前市北方町大瀬字永池		不詳		横穴式石室	II	—	C	キ
10	基山4号墳	佐賀県杵臼郡白石町馬池字上原木	後期後葉	円墳	12m	横穴式石室	I/II	a	B/C	オキク/ア
11	湯崎2号墳	佐賀県杵臼郡白石町湯崎	後期後葉	円墳		横穴式石室	I	a	—	—
12	長戸鬼塚古墳	長崎県諫早市小長井町小川原通	後期後葉	円墳	17m		II	—	A	キク
13	善神さん古墳	長崎県諫早市高栄町三部巻字尾の上	後期後葉	不詳		横穴式石室	I	a	B	ア
14	鬼塚古墳	長崎県壱岐市郷ノ浦町安輪	飛鳥	不詳		横穴式石室	I/II	b i	A	ア
15	大木古墳	長崎県壱岐市郷ノ浦町山原船字大木	後期後葉	不詳		複室横穴式石室	I	b i	C	ア
16	双穴古墳	長崎県壱岐市藤本町立石東船字双穴	後期中葉	前方後円墳	53m	横穴式石室	I	b i	C	キク
17	百田頭5号墳	長崎県壱岐市芦辺町国分本村船字登屋ノ森	後期後葉	円墳	10m	複室横穴式石室	I	b iii	C	キ
18	兵衛古墳	長崎県壱岐市芦辺町国分本村船字兵衛	後期後葉	円墳		複室横穴式	I	b i	C	キ
19	山ノ神塚古墳	長崎県壱岐市					—	—	—	—
20	永田12号墳	長崎県壱岐市	後期中葉	円墳		横穴式石室	I	b i / b ii	C	キク
21	釜蓋3号墳	長崎県壱岐市	後期中葉	円墳		横穴式石室	—	—	—	—
22	釜蓋5号墳	長崎県壱岐市	後期後葉	円墳		横穴式石室	—	—	—	—
23	釜蓋6号墳	長崎県壱岐市	後期前葉	円墳		横穴式石室	—	—	—	—
24	伊波鬼塚古墳	大分県国東市国東町中	後期後葉	円墳?		横穴式石室	I	a/b/i	A	エ/ク
25	大洞9号石棺	熊本県玉名市信明町野口大原	前期	不詳		箱式石棺	I	a	B	ア
26	城山岡2号横穴	熊本県玉名市清ノ上城山岡	後期後葉	横穴		横穴	II	—	C	ク
27	石貫古墳II-13号横穴墓	熊本県玉名市石貫古城原	後期後葉	横穴		横穴	I	b i / b ii / B	C	ク
28	福岡古墳	熊本県宇土市福岡古墳	飛鳥	不詳	20m	横穴式石室	II	—	C	キ
29	福岡古墳	熊本県宇土市福岡古墳	飛鳥	不詳	15m~	横穴式石室	—	—	—	—
30	坂又古墳	熊本県宇土市坂又町坂又	飛鳥	円墳	25m	横穴式石室	I/II	b ii	C	ク/ク
31	宇土城石塚古墳石材	熊本県宇土市神前町宇土城三の丸跡		総布材			II	—	C	ク
32	不知火塚原1号墳	熊本県宇城市不知火町高良塚崎坊守	後期後葉	不詳		横穴式石室	I	b ii	C	ク
33	松原1号墳	熊本県宇城市不知火町長崎白玉	飛鳥	円墳	15m	横穴式石室	I	b ii / b iii	C	キ
34	松原2号墳	熊本県宇城市不知	飛鳥	不詳		横穴式石室	I	b ii	A	ア
35	ツンゴン塚古墳	熊本県宇土市塚田町火町長崎白玉	中前期	円墳		横穴式石室	I	b ii	C	ア
36	橋原古墳	熊本県宇土市橋原町	飛鳥	方墳	17m	横穴式石室	I	b i	B	ア
37	津ヶ池3号横穴墓	宮崎県宮崎市大字字一 大字清水	後期後葉	横穴		横穴	I	a	B	ア
38	中玉免1号横穴	宮崎県松江市山代町中玉免	飛鳥	横穴		横穴	I	a / b iii	B	ア
39	區谷12号横穴墓	宮崎県松江市山代町區谷		墳丘		平入横穴墓	I	b i	C	ア
40	島田池4区4号横穴	宮崎県松江市東出雲町	飛鳥	横穴		横穴	I	b i	C	ア
41	阿古山22号墳	鳥取県鳥取市青谷町青谷	後期後葉	円墳		石室	I/II	b i	B/C	キク
42	吉川43号墳	鳥取県鳥取市青谷町吉川	不詳	円墳		石室	I	b i	C	ア
43	英敷41号墳	鳥取県鳥取市国府町英敷		円墳	16.0m	横穴式石室	—	—	—	—
44	英敷43号墳	鳥取県鳥取市国府町英敷		前方後円墳	22.5m	横穴式石室	—	—	—	—
45	福山古墳	鳥取県鳥取市国府町福山	後期後葉	円墳	10.0m	横穴式石室	I	b iii	C	ク
46	福本4号墳	鳥取県鳥取市国府町福本		不詳		石室	—	—	C	—
47	高下22号墳	鳥取県鳥取市国府町高下	後期後葉	円墳	12m	横穴式石室	II	—	B	エキク
48	笠山15号墳	鳥取県鳥取市久米	後期後葉	円墳	12m	横穴式石室	I/II	b i	C	キク
49	笠山16号墳	鳥取県鳥取市久米	後期後葉	円墳	15m	横穴式石室	I	b iii	B	ア
50	三明寺古墳	鳥取県倉吉市鹿嶋	飛鳥	円墳	18m	石室	I	a	C	ア
51	西穂波9号墳	鳥取県東伯郡北栄町六尾	後期中葉	不詳		石室	I	a	B	ア
52	西穂波27号墳	鳥取県東伯郡北栄町六尾	後期中葉	円墳	10.0m	石室	—	—	C	—
53	長峯ヶ字古墳 (向山5号墳)	鳥取県米子市定之町	後期前葉	前方後円墳	48.5m	横穴式石室	—	—	—	—
54	宮が尾古墳	香川県喜多郡市宮が尾	後期後葉	円墳	22m	横穴式石室	II	—	A	エキ
55	宮が尾2号墳	香川県喜多郡市宮が尾	後期後葉	円墳		横穴式石室	—	—	—	—
56	同5号墳	香川県喜多郡市大原町大字田	後期後葉	円墳		横穴式石室	—	—	—	—
57	興昌寺山1号墳	香川県観音寺市八幡町	後期後葉	円墳	20m	横穴式石室	I	b i	C	ア
58	北峯1号墳	大阪府柏原市田辺2丁目	後期後葉	円墳	8m	横穴式石室	I	b i	C	ア
59	高井田2-12号横穴	大阪府柏原市高井田	後期中葉			横穴	I	b i / b ii	C	ク
60	高井田2-27号横穴	大阪府柏原市高井田	後期中葉			横穴	II	—	A	ク
61	高井田3-5号横穴	大阪府柏原市高井田	後期中葉			横穴	II	—	A	エキ
62	岩坂藤瀬山1号横穴	石川県珠洲市羽津郡志水町				横穴	I	b i / b ii	B	ア
63	寺山横穴群3号	石川県珠洲市羽津郡志水町	後期中葉			横穴	—	—	—	—
64	堂後下9号横穴	神奈川県中郡大磯町				横穴	I	b iii	A	ア
65	堂後下12号横穴	神奈川県中郡大磯町				横穴	I	b i	A	ア
66	久地西前田1次-2号横穴	神奈川県川崎市高津区				横穴	I	b i	C	ア
67	七石山12号墳	神奈川県横浜市栄区				横穴	—	—	—	—
68	熊ヶ谷2号横穴	神奈川県横浜市青葉区	後期後葉			横穴	I	b i	A	ア
69	大日ヶ塚1号横穴	神奈川県中郡二宮町緑が丘	飛鳥			横穴	I	b i	C	ア
70	大日ヶ塚9号横穴	神奈川県中郡二宮町緑が丘	飛鳥			横穴	I	b ii	C	ア
71	洗馬谷横穴墓群二号墓	神奈川県鎌倉市栗谷				横穴	I	a	—	エキ
72	万田宮ノ入8号横穴	神奈川県厚木市栗田字宮ノ入	飛鳥	なし		横穴	I	b ii	A	ア
73	大滝1群1号横穴	千葉県富津市岩坂		なし		横穴	I	b i / b iii	C	キク
74	大滝1群2号横穴	千葉県富津市岩坂		なし		横穴	II	—	C	ア
75	亀田大谷1号横穴	千葉県富津市亀田		なし		横穴	—	—	—	—
76	塚6号横穴	茨城県常陸太田市種町バック下	後期後葉	なし		横穴	I	b i	C	キ
77	地蔵塚古墳	埼玉県行田市藤原町	飛鳥	方墳		横穴式石室	I	a	B	エキ
78	高岩18号墳	宮城県大崎市				横穴	I	b i / b ii	A	エ

装飾古墳の図像検討においては、周囲に描かれた図像やモチーフの扱われ方を検討することも重要であるため、本文中に示した分類に加え、以下の観察事項を設けて表に加えた。

- 全体 (施文箇所が同じもの) の装飾の中での船の用いられ方による分類 (表4, 5内「船図像の用いられ方」)
 - A、船以外の具象文と一体となり、情景の中の一モチーフとして表現される (構図が意識されている) もの
 - B、円文・同心円文など幾何学文などと同列に並べて用いられる (構図を持たず、記号的に用いられる) もの
 - C、船のみ表現されるもの
- 船に付属するもの (乗るもの) による分類 (表4, 5内「付属物」)
 - ア、何ものなし / イ、鳥 / ウ、馬 / エ、人 (一人) / オ、人 (複数) / カ、荷物 (屋形、棺含む) / キ、櫂 / ク、その他 (鯨、波)